

中国社会学論の古典書

費孝通著／西澤治彦訳
郷土中国



A5判 272頁
風響社
【本体2,000円＋税】

河合 洋尚

本書は、中国人類学・社会学の泰斗である費孝通が一九四八年に著した、『郷土中国』の全訳である。費孝通は、近代人類学の創始者の一人であるブロニスラウ・マリノフスキーのもとで学び、中国における人類学・社会学の礎を築いた代表的人物として知られる。改革開放政策開始後の一九八二年、費氏は北京大学社会学部の教授に就任し、人類学と社会学の再建に尽力した。彼の研究の翻訳・紹介は日本でもすでに多数ある。

伝統的に欧米や日本の人類学では、人類学が海外を研究対象とし、社会学が国内を研究対象とする傾向が強い。マリノフスキーがニューギニア島東沖のトロブリアンド諸島でフィールドワークをおこなったように、費氏と親交が深かった英米の人類学者の多くは、海外を調査対象としていた。だが、

費氏は、イギリスで人類学を学んだにもかかわらず、母国である中国を主要な研究対象として選んだ。また、費氏は中国国内の社会問題に注視し、その解決への貢献に強い関心を寄せてきた。それだけに、彼自身は、人類学と社会学を明確に分けることなく、応用実践を視野に含めた研究を展開してきた。

費氏のこうした学問的姿勢は、『郷土中国』でも顕著に表れている。費氏がこの本で目指したのは、『郷土社会』（この概念については後述する）としての中国の特徴をより正確に捉えることであった。それにより、晏陽初（Y. C. James Yen）らが当時進めていた農村改良事業の「誤解」を正そうとしたのである。晏陽初は、アメリカのイェール大学で政治学と経済学を学び、一九二二年より中国の農村で全国識字運動を始

めた人物である。晏氏は、中国の農民が「愚・貧・弱・私」の「四大病」を抱えていると指摘し、実際に中国の農村で文字普及事業を展開した。人類学を学んだ費氏にとって、キリスト教徒でもある晏氏らの平民教育運動は、西洋中心主義的な啓蒙のプロジェクトに見えたのかもしれない。費氏の『郷土中国』は、中国のフィールドワークで見聞した「現地の視点」から、こうした啓蒙のプロジェクトに反論を試みる著作となっている。

『郷土中国』は十五の章から構成されている。さらに、本書には訳者の西澤治彦氏による詳細かつ丁寧な「訳者まえがき」「訳者解題」「訳者あとがき」がついており、これらを読めば各章の概要を把握できるようなっている。したがって、ここでは各章をそれぞれ要約することはせず、評者なり視点から本書の内容をまず紹介することにした。

後述するように、評者は『郷土中国』を費氏の中国社会論として位置づけている。その主体となっているのは、①文字論、②公私・組織論、③家族・ジェンダー論、④法・道徳論、⑤権力論である。①は第二章「文字を農村へ」と第三章「再び「文字を農村へ」を論ず」、②は第四章「差序的な構造配置」と第五章「個人間を繋ぐ道徳」、③は第六章「家族」と第七章「男女に別あり」と第十二章「血縁と地縁」、④は第八

章「礼治秩序」と第九章「訴訟のない社会」、⑤は第十章「無為政治」、第十一章「長老政治」、第十三章「名と実の分離」、第十四章「欲望から需要へ」が中心となっている。ただし、五つのトピックは章ごとに明確に分けられるわけではない。例えば、第四章は基本的に中国の公／私概念や組織論を述べているが、その根幹に家族を位置づけている。また、第十二章は家族や血縁について述べているが、権力の問題と切り離すことができない。むしろ本書は、これら五つのトピックが複雑に絡み合った中国社会論であるといえるだろう。このことを前提として各トピックにおける費氏の主張を簡潔にまとめると、次の通りである。

①文字（テキスト）論

農村改良運動に携わる人々は、中国の農民が「愚か」である理由として識字率の低さを挙げる。だが、文字を読めないこと＝愚かではない。文字は、宗教に起源しており、人々が直接的に接触できない特殊な状況下で普及したツールに過ぎない。常に対面的な関係にある農民にとって、文字は、生活のうえで必要なものではなかった。農民は、文字を知らなくても、生活するうえで知恵を豊富にもっている。農村に文字を普及させることは反対しないが、「知識」に偏重するのではなく、農民の「知恵」を重視する必要がある。

②公私・組織論

中国農村が抱える問題は「愚」ではなく「私」であるが、それは都会人にもあてはまることである。中国の公／私の概念や組織のありかたは、西洋のそれと異なっている。西洋の組織は「団体的な構造配置」を基盤とする。西洋では、個人（私）が束のように集まり団体（公）を形成する。団体の成員は固定されており、団体の秩序を守るために個人は契約を結んでいる。それに対して、中国の組織は「差序的な構造配置」〔差序格局〕を基盤とする。中国の社会組織は、石を水面に投げたあと波紋が広がっていくように、個人を中心として外へと同心円状に拡がっている。このモデルの中心は個人や家族であり、その外側に非血縁を含む仲間↓近隣↓国家が位置している。中国における私と公は相対的な関係にあり、家族（私）にとって仲間は公になるし、仲間（私）にとって国家は公（すなわち公家）となる。そして中国社会において私には公より優先度が高い。だから、中国では、内側の組織（私）のために外側の組織（公）を犠牲にするのが差序的な構造配置の道徳である。それは「個人主義」ではなく「自我主義」と呼ぶのが適切である。

③家族・ジェンダー論

だから、西洋のファミリーと中国の家は、社会構造のうえ

で同じではない。西洋のファミリーは、子女の生育を根幹に据えるため、規模が小さく、子供の成長によって分裂したり、個人の死亡によって消滅したりする。だが中国の家は、事業をおこなうための組織でもあり、永続性が求められる。家は、事業が小さければ夫婦を中心とし、事業が大きければ兄弟やオジなどの大勢が集まるような、伸縮可能な組織である。また、家は経営組織である以上、規律の維持が不可欠である。それにより、私情を管理し、特に男女間の激しい感情を生み出さないよう規制しなければならない。だから、中国の伝統社会では男女（とりわけ夫婦）の関係は淡白で、男女が別々に行動するのが基本となる。

④法・道徳論

西洋は「法治社会」、中国は「人治社会」であると言われるが、この表現は適切ではない。西洋でも法を通して人が治めており、判決において司法官の解釈が多分に含まれるからである。もし法律が国家権力によって維持される規則であるとすれば、中国農村は法が存在しない社会であるといえる。しかし、中国社会は、法律とは別の体系によって、つまり「礼」によって律せられてきた。「礼」とはその社会で「正しい」とされる道徳であり、伝統的な規範である。例えば、「礼」には長幼の序が含まれており、たとえ父親がア

中国年鑑2020

◎ 好評発売中 ◎

中国研究所 編・発行

明石書店 発売

1955年創刊。現代中国に関する最新・基本情報満載の、一国を扱う珍しい年鑑。

B5判 512頁
(カラー口絵8ページ)
価格:18,000円+税

◆特集=中国建国70年の光と影

◆動向

政治、台湾・香港・マカオ・華僑、対外関係、経済、文化、社会

◆要覧・統計

国土と自然、人口、国のしくみ、軍事、少数民族、国民経済、農業、工業、資源・エネルギー、交通運輸、対外経済、知的財産権、労働、暮らし、社会保障・医療制度、環境問題、教育、NGO・NPO、教育、宗教、日中関係ほか

◆資料

統計公報、重要文献、主要人事、2019年日誌ほか

※お問い合わせは中国研究所事務局まで

一般
社団法人 中国研究所

〒112-0012

東京都文京区大塚 6-22-18

TEL: 03-3947-8029

FAX: 03-3947-8039

e-mail: c-chuken@tcn-catv.ne.jp

URL: <http://www.chuken1946.or.jp>

ヘンを吸っていたとしても、子がそれを咎めれば罪となる。中国の伝統社会は「礼治社会」である。ただし、近年では少しばかりの法律の知識を得た人々が伝統的な道徳を超えて法に訴えることがあるので、近年の中国では礼治社会としての性質が崩れつつある。だが、それに代わる法治秩序はまだ整えられていない。

⑤ 権力論

権力は四種類ある。一つ目は「横暴的な権力」であり、実権を握った勝者（皇帝権力など）が、敗者（農民など）を支配し、命令し、意のままに操る。二つ目は「同意に基づく権力」であり、分業が顕著な社会で現れる。AがBに何かをするよう干渉・要求し、BがAに義務として応えるが、その関係の背景には契約による同意がある。この二つの権力形態は中国

で併存している。ただし中国では、表面的に国家権力が強いようにみえるが、歴史的にみると、実際には農民にそれほど干渉しない「無為政治」が確立されてきた。だが中国社会が「民主的」であったわけではないし、中国社会を、民主的であるか否かという基準で測ることはできない。中国では伝統的に「正しい」とされる道徳・振る舞いを下の世代に教え込む第三の権力、すなわち「教化主義的な権力」が優勢であった。ただし、時代の変化に伴い、人々は新しい環境に適応する処方箋をつくりださねばならない。その時に出現する権力こそが、「時勢的な権力」である。この四つ目の権力は、中国社会を近代的な国家につくりかえていく動力でもあり、知識こそがその源泉となる。

本書を読むうえで注意しなければならないのは、それが今

から約七〇年も前に書かれた本だということである。全体的に『郷土中国』は文化相対主義、特に当時のアメリカ人類学の主要パラダイムであった「文化とパーソナリティ」学派の影響を受けている。この理論は、各社会の本質的特徴を描き出すことに関心を寄せており、「自社会」と「他社会」をめぐる過剰な対比を描き出したとして、今日批判されている。この問題は、本書にもそのまま反映されている。本書は、費氏が中国の各地で実施したフィールドワークを基盤としているが、それを中国という枠組みに拡大し、西洋と中国の鋭い対比を描き出しているのである。中国の本質的特徴を示すために費氏が考案した概念が、郷土社会である。郷土社会とは、中国の基層社会であり、中国伝統社会の特質であるのかとよく描かれている。だが、本書で言及される中国の郷土社会とは具体的にどこを指すのであろうか。この概念は伝統的な中国農村を基盤としているが、時として都市にも敷衍されている。しかし、その特質が中国の全土に敷衍できるかどうかは、慎重になる必要がある。中国という国境を一步超えるとは途端に郷土社会の特質がみられなくなる、というわけでもないだろう。家庭で話すこともない夫婦の姿などは、現代日本社会でも十分みられる。

そうした意味で、本書は、中国の本質を描き出すことに腐心

した中国社会学論である。だが、本書を読むと、今の人類学や中国研究にとっても示唆的な記述が少なくないことに改めて気づかされる。誤解を恐れずに言えば、人類学で文字、公／私、民主、権力をめぐる議論が多く、注目を集めるようになったのは、一九八〇年代以降のことである。中国の法人類学的研究はいまだに乏しい。こうした状況を鑑みると、本書には先駆的・独創的な見解が多分に含まれているといえる。また、日本でも人類学の実用性がますます問われている今、本書は多くの示唆を与えてくれるだろう。

本書は、西澤氏が既訳書を参照して、概念・表現を再検討しながら訳出したものである。原文の表現に忠実になりすぎている箇所は若干あるが、だからといって文章がかたいわけではなく、訳書とは思えないほど読みやすいものになっている。西澤氏による解説も大変充実したものになっており、中国語の原文をすでに読んだという方も、手にとってみることをお勧めする。

(かわい・ひろなお 国立民族学博物館)